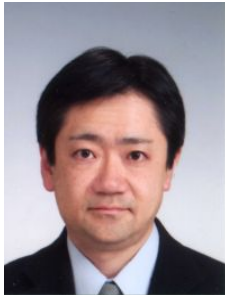




日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター
平成17年度第1四半期(4月～6月)活動報告

就任ごあいさつ

ロンドン研究連絡センター長 小山内 優



この5月に独立行政法人日本学術振興会ロンドン研究連絡センター長を拝命しました。先日、ロンドンでは多数の市民が犠牲となるいたましい事件があり、事件後各方面から御心配を頂きました。当センターに声をかけて頂いた方々には、この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。

当地着任後は、学術の世界で日英関係が今後発展していくべき方向について学ばせて頂くとともに、センター長の重責を実感する日々が続いております。

利に賢い英国の人々は、経済においては80年代以降着実に「英国病」を克服し、世界の企業ランキングを見ても、伝統的に強い金融や石油に加え、近年ではヴォーダフォンなどが上位に入り、一部では日本企業を上回る発展を遂げています。

政治や外交においても、英国政府はいつも国際世論を形成する側に加わるとともに、常に「勝ち組」に回り、大義に殉じて「負け組」に残ったりすることはほとんどありません。

スポーツの世界でも、本腰を入れて挑んだ2012年の夏季五輪招致合戦では最後に勝利をもち取りました。

英国から収奪されたはずの数多くの旧植民地はコモンウェルス諸国として英国と緊密な関係を保ち続けており、特に文化や教育においては、これらの諸国からは、少なくとも米国と同じくらい頼られる存在であり続けています。

米国ほどの経済力を持たない英国では、政府とNGOと企業が巧みに協力しながら多様な資源を活用して、(水面下では英国の国益もちゃんと考えながら)国際協力を行っています。例えばG8の直前に開催されたLive 8(ライブエイト)は英国を中心に世界の10会場を結ぶ史上最大規模の音楽イベントでしたが、運営にあたって英国のアーティスト以上に中心的な役割を担ったのは、英国の途上国協力NGOでした。頼られる理由は歴史的・文化的背景だけでなく、交流や協力活動にもあるようです。

一方で、ビートルズなどを聴いて育った少年時代の私にとって、かつての英国はたしかにあこがれの国でしたが、現在の日本の若い世代が英国を見る視線はビートルズや「007」の時代とは明らかに異なっており、英国の科学研究を「日本よりも下」「ドイツよりもたぶん下」「米国よりもずっと下」というイメージで見ているようで、当地に日本から留学している学生達の多くも、「米国の大学のレベルはもっと高いだろう。」と思っているようです。(それが間違っていないことも多いようですが。)

同様に、英国においては、かつて日本のオートバイメーカーや家電・音響メーカーなどが当地で猛威を振るった頃のような、日本の経済的脅威が感じられなくなりました。近年売り物の日本製アニメも、テレビの地上波で流れるのは土日の早朝くらいのもので、「ハリー・ポッター」が日本の子供に与える影響の方がはるかに大きいように思えます。残念なことではありますが、もともとEUでもコモンウェルスでも軍事大国でもない日本が再び英国人の関心の的となることは困難なようです。

では、自信を取り戻したイギリスの関係者とどう付き合っていけばいいのでしょうか？一般論としては、成熟した先進国同士、互いに有益な交流ができる分野の方々に個別に考えて頂くしかないし、それをお手伝いするとともに、より多くの関係者に考えて頂くよう働きかけていくのが私たちの仕事だと思っております。ところが、当地に赴任したばかりの私には、あまたの学術分野において、何をすることが互いに有益かを察し、ターゲットや手段を絞りこんで働きかけていく作業は容易ではありません。

加えて、当地の大学などの機関は、サッチャー政権以来早々に「護送船団」を離れて資本主義体制の下（当たり前ですが）、荒波に揉まれながら教育研究活動を行ってきているため、例えば当地の大学における人文社会系の日本研究に関しては、日本経済が脅威でないと思われるようになった途端に財源が細りはじめるといった苦い経験をしており、中長期的な見通しを持って行動することも必要になっております。

利に賢い彼らが納得できるだけの交流のパースペクティブを我々が用意していないということが往々にしてあります。ようやく昨年度から複式帳簿を付けながら資本主義社会の荒海に船を漕ぎ出した日本の国立大学の関係者にとって、分野毎、大学毎の日英交流を見通していくことは、大学運営、部局運営の見通しを立てていくことに相通ずる作業ではないかと思えます。これから御指導、御教示のほど、宜しくお願い申し上げます。

新体制発足

ロンドン研究連絡センターでは、2005年4月までセンター長を勤めた金口恭久・前センター長に代わり、小山内優・大学評価・学位授与機構教授が着任した。また、4月1日には小野道子研修生（山梨大学）及び二村肇研修生（北見工業大学）がセンターの一員に加わった。

（写真前列左から大川事務官，小山内センター長，岡本アドバイザー。後列左から二村研修生，ナタリー現地職員，小野研修生）



■ センターの主な活動

- 4月
- 1日 小野・二村研修生到着
- 5日 インタビュー調査(岡本)(インペリアルカレッジ)
- 7日 インタビュー調査(岡本)(MRC)
同窓会“Fellowship Event”会場下見(大川, ナタリー)(Gallerie Besson)
- 11日 インタビュー調査(岡本)(ケンブリッジ大学)
- 13日 グラスゴー大学戸田氏, センター来訪(金口, 大川)
ケンブリッジ大学 Dr Phill Taylor 氏及び Dr Louise Rolland 氏, センター来訪(大川, ナタリー)
インタビュー調査(岡本)(UCL)
- 14日 The Royal Society と会議(大川, ナタリー)(The Royal Society)
Japan Ship Centre 会合(大川)
- 15日 EPSRC Annual Conference(岡本, ナタリー)(The British Library)
- 18日 インタビュー調査(岡本)(サウサンプトン大学)
The British Academy と会議(大川, ナタリー)(The British Academy)
- 21日 North Umbria 大学 Dr Komal 氏, センター来訪(大川, ナタリー)
- 25日 インタビュー調査(岡本)(ウォーリック大学)
- 27日 インタビュー調査(岡本)(サウサンプトン大学)
- 28日 金口所長帰国
インタビュー調査(岡本)(ケント大学)
- 5月
- 5日 理化学研究所 入来教授, センター来訪(大川)
インタビュー調査(岡本)(オックスフォード大学)
- 6日 インタビュー調査(岡本)(インペリアルカレッジ)
- 9日 インペリアル・カレッジ Roger C Reed 教授, センター来訪(大川, ナタリー)
研究者コミュニティー支援事業会合
- 10日 小山内所長出張(～20日)
- 11日 国際交流基金ロンドン事務所訪問(小山内, 大川)(国際交流基金)
ロンドン観光宣伝事務所訪問(小山内, 大川)(国際観光振興機構)

- 5月
- 11日 The Foundation for Science and Technology セミナー: “Science Policy and Management”に参加(小山内, 大川)(The Royal Society)
- 12日 在英日本国大使(野上大使), 次席公使・総括公使と面会(小山内, 大川)(在英日本大使館)
JETRO ロンドンオフィス訪問(小山内, 大川)(JETRO)
- 16日 在英日本大使館会合(大川)(在英日本大使館)
- 18日 インタビュー調査(岡本)(パターソン研究所)
- 19日 インタビュー調査(岡本)(ケンブリッジ大学)
- 20日 JSPS サマープログラム “Pre-departure Meeting”開催(The British Council UK)
同窓会会合 “Alumni Fellowship Evening”開催(Garelie Besson)
- 23日 大川事務官, 一時帰国
- 25日 事務官会議(大川)(日本学術振興会本部)
インタビュー調査(岡本)(ダンディー大学)
在英日本大使館主催 “Information Day”にて学振の事業説明及び大学の概要説明(ナタリー, 小野, 二村)(在英日本大使館)
- 27日 外国人特別研究員・欧米短期, 募集締切
- 6月
- 6日 Dr Philip Dean, センター来訪(小山内, 大川, ナタリー)
- 8日 ESRC セミナー “Does Secondary School size is matter?”に参加(小山内, 大川)(Institute of Education)
- 10日 インタビュー調査(岡本)(シェフィールド大学)
- 13日 Roger Lemon 教授と大規模シンポジウムの打ち合わせ(小山内, 大川, ナタリー)(Institute of Neurology, UCL)
- 14日 The Royal Society と欧米短期について打ち合わせ(大川, ナタリー)(The Royal Society)
- 15日 在英日本大使館会合(大川)(在英日本大使館)
- 16日 The British Academy と欧米短期について打ち合わせ(大川, ナタリー)(The British Academy)
- 17日 インタビュー調査(岡本)(エジンバラ大学)
- 20日 東京本部研究協力第1課伊藤氏, センター来訪
The Royal Society と欧米短期について打ち合わせ(大川, ナタリー)(The Royal Society)
- 21日 Dr Moore 氏と打ち合わせ(小山内, 大川)(Trinity Hall, ケンブリッジ大学)
インタビュー調査(岡本, 二村)(オックスフォード大学)
- 22日 文部科学省工藤補佐, センター来訪
- 23日 JETRO セミナーに参加(小山内, 大川, ナタリー, 小野, 二村)(ケンブリッジ大学)

■ Pre-departure Meeting

2005年5月20日、JSPS London Office と British Council Japan との共催で、British Council UK において、JSPS Summer Programme 参加者を対象に、“Pre-departure Meeting” を開催した。これは、参加者が本プログラムの理解を深め、帰国後も日英交流を継続的に、かつ活発に行えるための足がかりとするため、始められたものである。

当日は、渡日前にプログラムの概要説明及び準備に必要な日本の情報、さらには帰国後、次の日英交流のステップとして活用できるプログラムの紹介を



概要説明を行う大川事務官



親睦を深める参加者

行った。British Council Japan からの挨拶をはじめ、JSPS London Office による概要及び事業説明に続き、Biotechnology and Biological Science Research Council, The Royal Society 及び The Daiwa Anglo-Japanese Foundation からそれぞれ日英交流のプログラム説明が行われた。参加者からは事前に英国から参加する仲間を知ることができたことが有意義であったとの感想がよせられた。

(大川)

Programme

1. Opening remarks - British Council
2. The JSPS Summer Programme 2005 and other JSPS exchange schemes
Mr Okawa, the JSPS London Office
3. Research experience in Japan
Miss Melody Liles, 2004 JSPS Short-Term Award Programme participant, University of Cardiff
4. The Royal Society exchanges and collaborations with Japan
Ms Alison Payne, Senior Manager, International Grants Section, The Royal Society
5. The Research Council UK exchanges and collaborations with Japan
Dr Tim Willis, Head, International Relations, The Biotechnology and Biological Science Research Council (BBSRC)
6. The Daiwa Anglo-Japanese Foundation exchanges and collaborations with Japan
Mr Jeremy Barraud, Director of Programmes, The Daiwa Anglo-Japanese Foundation
7. British Council exchanges and collaborations with Japan
Dr Ken Ho, British Council, Japan
8. Q&A with scones and tea

■ UK JSPS Alumni Association: Alumni Fellowships Evening



2005年5月20日夕刻、UK-JSPS Alumni Associationによる“Alumni Fellowships Evening”が開催された。本会合は、JSPSのプログラムに参加した研究者及び日本に関心を寄せる研究者等が、日英の研究に関する情報交換を行うとともに、英国において日英の研究者コミュニティを広げようとするものである。今回は同窓会会員に加え、同日の午後に行われた“Pre-departure Meeting”の参加者も招待された。また東京本部から清水睦久・研究協力第一課主任、角田亜紀子・人物交流課主任及びDr. Ho・ブリティッシュ・カウンシル東京科学担当部長も参加した。

会場：Gallerie Besson

同窓会会長である Peter Sammonds 教授 (UCL) が本会の目的や最近の活動について述べた後、Dr. Martin Kingsbury 副会長 (Imperial College London) が自身の日本での経験を語った。今回は人間国宝の陶芸家である Tatsuzo Shimaoka 氏の個展が行われていたギャラリー：Gallerie Besson において開催され、日本文化に直接触れながら、現在及び未来の同窓生たちは終始なごやかな雰囲気でお互いの経験について語り、親睦を深めていた。



Sammonds 会長の挨拶



至高の芸術に囲まれるなか談笑する参加者

本会合には帰国後も当活動に貢献してもらい、より日英の研究者コミュニティが拡大していくことが期待される。また、小規模ではあるが、英国内全体でコミュニティ形成が図れるよう、本会合のような集まりが様々な地域で多く開かれることが望まれる。

(Natalie)

Information Day

2005年5月25日、在英日本大使館において、“Information Day”が開催された。一昨年からはまったこのイベントは、英国内の大学の進路指導担当者を集め、日本文化や各種スカラシップ等の紹介を行うものである。

セッションは午前と午後に分かれ、午前はJETプログラム及び国費留学生制度に続き、ナタリー現地職員がJSPS事業の概要説明を行った。午後には在英の教員等による日本の大学の概要説明が行われ、小野研修生（山梨大学）及び二村研修生（北見工業大学）もこれに参加した。

英国の大学関係者が集まる機会は貴重であり、今後も積極的な参加が望まれる。

(二村)

Programme

1. Welcome – Futao Motai, Director of Japan Information and Culture Centre
2. Brief introduction of Japan
3. JET Program
4. MEXT Scholarship
5. Daiwa Foundation scholarship
6. JSPS
7. British Council Japan related Information

(Introduction of Japanese universities)

8. 山梨大学
9. 北見工業大学
10. 大阪大学
11. 北海道教育大学
12. 室蘭工業大学
13. 山形大学
14. 茨城大学
15. 弘前大学
16. お茶の水大学

初めての英語プレゼンに冷や汗

このたび所属大学についてプレゼンテーションを行う機会をいただきました。「やっぱり日本語じゃなくて英語で発表するんですね……。英国で暮らし始めて1ヶ月あまり、日常会話も満足にこなせないのにましてやプレゼンなど、と最初は尻込みしてしまいましたが、オフィスのみなさんの助けもあり、大きな失敗もなく発表を終えることができました。

資料集めから原稿作成まで苦労の連続でしたが、またとない貴重な経験をさせていただきました。今後も同様な機会があればまたぜひ挑戦したいと思います。

(小野、二村)



プレゼンテーションを行う小野研修生（左）及び二村研修生（右）

■ UK JSPS Alumni Association General Assembly 2005: Evening Lecture and Debate

2005年7月14日夕刻、The Royal Geographical Societyにて、同窓会総会(第2回):UK JSPS Alumni Association General Assembly 2005 and Evening Lecture and Debate ‘Earth Shaking Events: Natural Disasters and their Global Impact’が開催された。会合では、Dr Darren Bagnall氏からMiss Melody Lilesへの役員(秘書担当)交代の報告等、議事が執り行われた後、

「自然災害」をテーマにした講演会・討論会が行われた。今回は、日本から佐竹健治教授(産総研活断層研究センター)を、英国からJulian Hunt教授(UCL)及びDr Terry Cannon(グリニッチ大学)を招へいし、自然災害に関する自然科学の観点からの発表だけでなく、自然災害

に対する社会・政府の在り方等、人文・社会科学の角度からも発表があった。こうした講演の構成が全参加者の関心をひきつけ、熱心な議論が繰り広げられた。終了後、多くの参加者から主催



佐竹健治教授の研究発表

者に対して賛辞が寄せられた。また当会合では同窓会メンバーに限らず、政府関係者、関連分野の研究者及びNGOからの参加があり、総勢60名程度の会合となった。今回の講演会・討論会は初めての試みであったが、同窓会メンバーのためだけの会合というだけでなく、新たに様々な分野の人々と関係を深めることができた。今後ともこのような会合を通じ、この研究者コミュニティーが発展していくことが望まれる。

(大川)



討論会の様子

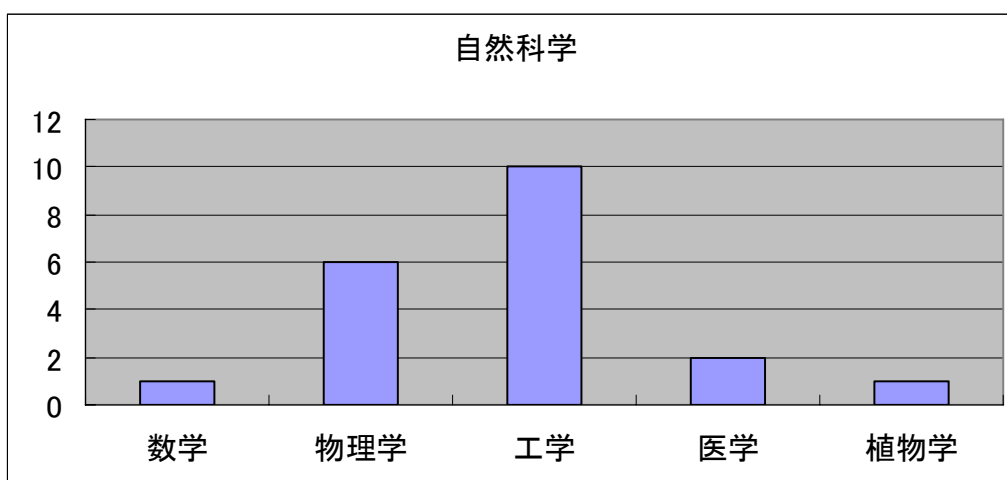
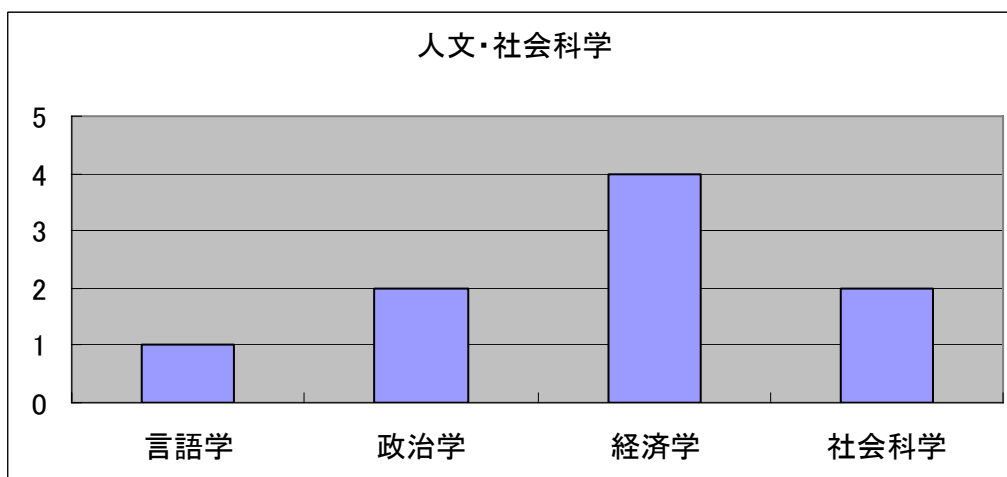
Programme	
18:00	Annual General Assembly
18:25	Break
18:30	Evening Lecture & Debate
	1. Introductory Speeches
	2. Speech by Professor Kenji Satake
	3. Speech by Professor Bill McGuire
	4. Speech by Dr Terry Cannon
	5. Discussion and Questions
20:30	Reception and Buffet

■ 外国人特別研究員(欧米・短期)申請状況について

当センターでは、外国人特別研究員（欧米・短期、2005年11月1日～2006年10月30日派遣分）の募集を4月上旬～5月27日にかけて行ったところ、29件の申請を受理した。これらの申請のうち、人文・社会科学分野の申請9件を The British Academy、自然科学分野の申請20件を The Royal Society に審査を依頼した。9月下旬には各申請者に合否通知を発送する予定である。

今回の募集では、英国にて研究を行っている優れた研究者を日本に招へいするという観点から、英国籍の者及び英国の永住権を持つ者に焦点をあて、資格要件を設定した。次回の募集（2006年4月1日～2007年3月31日派遣分）では、当プログラムの認知度をよりいっそう高めるため、広報の一環として NewScientist 等学術刊行誌に広告を掲載することを検討している。

(申請分野数)



■英国トピックス 授業料制度 - Top up fees をめぐる動き -

Top-up fees とは、大学の授業料を、年額 3000 ポンド（約 60 万円）を上限として各大学が自由に設定することを可能とする制度である。昨年、英国政府はこの Top-up fees の導入を決定したが、対象となるのはイングランドの大学のみで、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドが同様の制度を導入するか否かは各議会の判断に委ねられていた（詳細は本ニュースレター 2004 年第 3 号参照）。最近になり、各議会の方針が出そろった。以下その概略を述べる。

北アイルランド：北アイルランド議会は 1 月 20 日、英国政府から提案された Top-up fees 関連法案を否決した。票決は 11 対 10 の僅差であった。

スコットランド：スコットランド議会は 4 月 20 日、「Further and Education Bill」を可決した。これは、イングランドから学生が流入しつつある状況をふまえ、スコットランドの大学における自国出身の学生の割合を保つための立法であり、医学部など、自国出身の学生の割合が低下しつつある学部では、国外からの学生に高額な授業料を課すことが可能になった。自国出身の学生については、スコットランド政府が授業料を肩代わりするという現行の制度が維持される。

ウェールズ：ウェールズ政府の委託を受けた Rees 教授の報告書が 5 月に発表され、ウェールズも同様の制度を導入すべきとの内容であった。しかしウェールズ議会は 6 月 22 日、国外からの学生に対してのみ Top-up fees を導入することを決定した。ウェールズ出身の学生については、現行の授業料（年額 1200 ポンド、約 24 万円）が据えおかれる。

Top-up fees は 2006 年秋の入学生から適用されるため、2005 年秋の入学者選抜では、駆け込み的に志願者が増加した。4 月末に発表されたデータ（下表参照）によると、前年比 8% の増加であった。

また、いち早く Top-up fee の導入が決まったイングランドから、安い学費を求めて学生が“流出”していることも見てとれる。実際、イングランドの大学へ出願したイングランド出身の学生数が前年比 8.9% 増なのに対し、ウェールズ、スコットランドの大学への出願数はそれぞれ 12% 増、17% 増となっている。昨年のデータではそれぞれウェールズ 1.9% 増、スコットランド 4.4% 増だったことと比べると、大幅増といえる。しかし今後もこの傾向が続くかどうかは不透明である。各議会の方針決定により、イングランドの学生は国外に出ても安い授業料の恩恵を受けることはできなくなった。

いっぽう英国政府は、Top-up fees 制度について国民の理解を得るべく、数百万ポンドをかけてテレビCMなどのキャンペーンを実施する予定であり、同制度の導入促進にはなお積極的である。今後の動向が注目される。

(二村)

参考：EducationGuardian <http://education.guardian.co.uk/>

表：3月24日時点での出願数内訳（UCAS 発表，4月28日）

<http://www.ucas.ac.uk/new/press/news280405/index.html>

		England	Wales	Scotland	Northern Ireland
England	2005	318,451	42,021	28,948	1,128
	2004	292,315	37,520	24,744	865
	% change	+8.9%	+12.0%	+17.0%	+30.4%
Wales	2005	12,241	14,311	974	73
	2004	11,629	13,141	829	52
	% change	+5.3%	+8.9%	+17.5%	+40.4%
Scotland	2005	4,981	390	30,267	185
	2004	4,778	343	29,758	171
	% change	+4.2%	+13.7%	+1.7%	+8.2%
Northern Ireland	2005	8,503	862	5,810	14,887
	2004	7,626	733	5,557	14,272
	% change	+11.5%	+17.6%	+4.6%	+4.3%
Rep. of Ireland	2005	4,320	1,356	2,975	2,672
	2004	3,925	1,295	2,784	2,646
	% change	+10.1%	+4.7%	+6.9%	+1.0%
Other EU	2005	14,446	1,530	3,798	119
	2004	9,461	990	2,511	63
	% change	+52.7%	+54.5%	+51.3%	+88.9%
Other overseas	2005	30,396	4,349	6,263	587
	2004	32,384	4,278	5,931	512
	% change	-6.1%	+1.7%	+5.6%	+14.6%
Total	2005	393,338	64,819	79,035	19,651
	2004	362,118	58,300	72,114	18,581
	% change	+8.6%	+11.2%	+9.6%	+5.8%

監 修：小山内 優（ロンドン研究連絡センター長）
 編集長：大川 晃平（ロンドン研究連絡センター事務官） 編集担当：二村 肇（研修生）
 執筆：小山内 優，大川 晃平，Natalie Loader，小野 道子，二村 肇